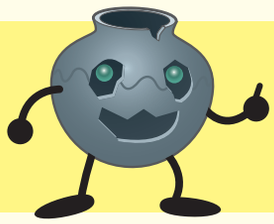
天城遺産

Histrical / Natural heritage in Amagi town

シリーズ天城遺産　その３７



900年前の特産品!?
カムィヤキ

今より41年前、昭和58年(1983年)に伊仙町において、**南島考古学史上最大の発見**と評されるカムィヤキの窯跡が見つかりました。6月16日、当時の伊仙町職員、四本延宏さんが整備のために掘り返された阿三の亀焼池周辺の現場に赴いたところ、そこには多くの焼物の破片が散らばり、さらに焼物がぎっしり埋まっている灰の地層や、土が楕円形状に大きく焼けた跡を発見しました。四本さんから連絡を受けた鹿児島県文化財課や笠利町歴史民俗資料館の職員らによって中世の窯跡だと断定され、そこで生産されていた焼物は、当地の地名「亀焼」のシマグチから「カムィヤキ」と名付けられました。その後の調査によって、いくつもの窯跡が発見され、一大生産地だったことが判明します。何しろ、奄美や沖縄の島々にあるグスクや集落跡から頻繁に出土していた朝鮮の陶器そっくりの焼物が、徳之島で生産されていたという事実は、研究者にとって大きな衝撃でした。

ユイの館に展示中・中里遺跡の壺はA群

前期（A群）の壺

後期（B群）の壺

徳之島と貿易関係図

カムィヤキ生産のいきさつ

10世紀ごろから北部九州を中心に宋や高麗との貿易が盛んに行われるようになり、仏教の法具や螺鈿細工の材料として珍重される琉球列島産ホラガイやヤコウガイを調達しようとした集団が、11世紀ごろ高麗から陶工を招いてカムィヤキの生産を始めたのではないかと考えられています。カムィヤキには、壺、鉢、甕、碗、水注などがあり、生産量の7割が壺で、比較的大きくて実用性の高い貯蔵容器に注力していたようです。また、大きく**前期(A群)**と**後期(B群)**に分類され、前期は主に肉厚が薄く硬く、波状紋がほどこされていた壺でしたが、後期は厚くすべすべした壺になり、大型の鉢や甕の生産が増えました。どうやら生産方法(生産の簡素化や燃料の節約など)や、消費者の需要に大きな変化があったようです。

もっと情報が見られる
電子版はこちら

※長崎県大村市から沖縄県与那国町まで出土していますが、今のところ台湾からは確認されていません。

協力：熊本大学 大学院 准教授 新里亮人　編集：天城町教育委員会 具志堅亮、山田文彦